

子どもの路上生活経験と学校教育：インド、ニューデリーのストリートチルドレンを中心に

針塚，瑞樹
九州大学大学院博士後期課程3年

<https://doi.org/10.15017/10535>

出版情報：飛梅論集. 7, pp.1-17, 2007-03-26. 九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻教育学
コース
バージョン：
権利関係：

子どもの路上生活経験と学校教育

—インド、ニューデリーのストリートチルドレンを中心に—

針 塚 瑞 樹*

1 問題の所在と研究の目的

インドでは、社会階層によって異なる教育問題が指摘されている。ミドルクラス以上の子ども達に関しては、過酷な受験競争が社会問題となっている一方で、社会階層の低い子ども達にとっては、未就学の問題が存在する。大きな教育格差が存在する中で、ストリートチルドレンや働く子ども達に対する教育を、どのように構想していけばいいのだろうか。

開発の文脈において、教育は生活水準を改善し、貧困を撲滅し、万人に基本的な機会を与えることを可能にするものとして、その重要性が認識されてきた。その結果、教育へのアクセスに関して大きな改善が見られたが、現在では就学者数を増加させても多くの人がほとんど何も学習していないといった、教育の質が問題とされている。教育にアクセスする機会を得ても、教育の質が低いいため就学しても意味がない。その結果、技能を身につけていない卒業生は就職先が見つからない（世界銀行人間開発ネットワーク：2001, pp.5-6）。しかし、こうした指摘は、妥当なのだろうか。就学率が上がると、学歴競争が生じ、よりよい就職のために学歴そのものが評価されるようになる。途上国において、貧困がなくならず、生活水準が上がらない人々がいるのは、教育の質が理由なのだろうか。

江原（2001：pp.25）は、現在の開発問題の原因を社会開発の遅れ、教育の不足に帰し、学校制度へのアクセス増大に解決をあおぐ考え方が不十分であり、むしろ、現在の開発がもたらした結果に対して、教育の責任を自問する公正な立場から、教育を見つめ直すことが求められていると主張する。

ストリートチルドレンや児童労働は、就学率が上がると減るといった調査結果が出ている（UNESCO：2000, pp.28）。教育を普及することが、こうした問題を解決するとみなされている。基本的権利としての教育の機会を得てもなお、貧困状態にあたり、路上に住んだりする子ども達の未来については、教育は想定していないのだろうか。

そこで、本論文においては、ストリートチルドレンや働く子ども達と、彼・彼女らを対象に支援活動を行う NGO の教育実践に着目して、子ども達がフォーマルな教育にアクセスするまで、及びアクセスしてからの困難について検討することで、教育が開発の理念を実現する上で直面する限界

*九州大学大学院博士後期課程3年

について考察することを目的とする。筆者は、2002年の3月から2006年10月まで、断続的に16ヶ月間、インドデリー州ニューデリーに滞在し、ストリートチルドレンと働く子ども達を対象に支援活動をするNGOにおいて、活動の参与観察及び職員、子ども達へのインタビューを行ってきた。本論文の報告はそれらの調査中に得られた知見に基づいている¹⁾。

2 インドの社会と教育事情

インドでは近年急速な経済発展に伴い、都市部を中心に購買力のある中間所得層が台頭している。人口は、10億人を超え、生産年齢人口比率は05年に62.7%、若年人口も豊富で、15～24歳までの人口はおよそ2.1億人である。今後の経済成長が期待されるが、このような状況において、従来から指摘されている貧富の差は解消されてきているのだろうか。一国を単位として見る限り、順調な経済成長を遂げるインドであるが、1日1ドル以下で生活する貧困層がまだ人口の約35%を占めている²⁾ (世界子供白書：2006, pp.123)。

貧困層の人々の教育はどのようになっているのだろうか。インドでは、憲法により6-13歳までの全ての子ども達に対する無料の義務教育が、基本的権利として定められているが実現に至っていない。2001年から、政府はSarva Shiksha Abhiyan (SSA) というスローガンの下、フォーマルな形での学校教育に限らず、ノンフォーマル教育や代替教育を通して、良質な初等教育の実現を目指している。ここでは、段階的目標が定められており、全ての子ども達に2007年までに5年の初等教育を、2010年までに8年の初等教育を完成することが掲げられている(インド政府人的資源開発省：2005, pp.9)。このような就学事情の背景には、経済的な問題が指摘されている。初等教育段階での中途退学の60%が経済的な困難による (Jayapalan：2005, pp.163)。

表I インドにおける6-13歳の非就学児童の割合 (全児童数 194,028,643人)

	非就学児童の割合 (%)		
	地方	都市	全体
全児童 (6-13歳)	7.80	4.34	6.94
男児	6.78	4.33	6.18
女児	9.14	4.36	7.92
6-10歳	6.92	3.51	6.10
11-13歳	9.58	6.06	8.56

(2005年 インド政府人的資源開発省)

こうした状況がある一方で、インドにおけるミドルクラス以上の子ども達が直面する、過酷な受験競争が社会問題となっている。試験前の子ども達のノイローゼや、試験の結果が悪かったことを苦にした自殺などは、連日ニュースで報道されている。Guptaは、「恐怖の学校」と題した記事で、多くの受験生が試験の圧力にさらされた毎日を送っているため、子どものストレスや自殺を予防するために、親や教師は試験の結果が悪くても、それがこの世の終わりではないということを言い聞

かせる必要を書いている (Hindustan Times : 2004.12.4)。こうした、受験のストレスは、統一試験を受ける中等学校修了時 (10 年生) と後期中等学校修了時 (12 年生) において激しさを増す。12 年生終了時の試験結果に基づいて、進学できる大学が決まる。

押川 (1998 : pp.136-145) は、インドにおける教育格差の問題を、デリー州を事例として説明している。上記の中等教育終了段階時の統一試験の結果に、公立学校と私立学校の生徒の間で格差があることから、子ども達が初等教育段階で選択する学校によって、高等学校への進学が左右されることを指摘している。つまり、初等教育の段階で学費の高い、英語ミディアムの学校に通わせることが、子どもの大学進学を有利にする。逆に、学費が無料で、ヒンディー語ミディアムの政府立学校に通った生徒は、大学進学において不利である。初等教育段階で通う学校によってその後の進学に影響が大きいために、学費にどこまで支出できるかという家庭の経済状況が子どもの学歴を左右する。

このように、インドの教育に関する問題を論じる場合、全ての子ども達を対象とすることは難しい。子どもの属する社会階層によって、問題が大きく異なっているのである。

3 ストリートチルドレンを対象とした NGO による教育

3-1) ストリートチルドレンの定義

どのような子ども達をストリートチルドレンと定義するのかについて、統一された見解はない。ユニセフが 1996 年に打ち出した定義は、「路上が彼・彼女の日常的な住まいになっていて、適切な保護を受けていない子ども」という幅広い内容を含んだものである。

ここでは、ユニセフの分類を参考に、2000 年にインドでストリートチルドレンの大規模な調査において使用された分類を見ることで、路上で生活する子ども達の人数と生活形態を把握する。

表Ⅱ ストリートチルドレンの分類

Children on the street	家族と一緒にストリートで多くの時間を過ごす
Children of the street	Roof-less 家族とつながりや接触をもちながら、ストリートに住む
	Roof-less and Root-less 家族とつながりや接触がなく、ストリートに住む

(2000 年 Research Report on a Situational Analysis of Education for Street and Working Children in India)

世界中でこうしたストリートチルドレンの数は、数千万人とも 1 億人とも言われている。この内、インドのストリートチルドレンの人数はどれくらいであろうか。インドには、ストリートチルドレンの数に関する公式なデータは存在しない。1993 年まで、「ストリートチルドレン」というカテゴリーはインド政府の公式な用語として存在しておらず、「ネグレクトされた子ども達」の下位カテゴリーに含まれていた (Sondhi-Garg : 2004, pp.25)。しかし、ILO や UNDP によると、インドは

ストリートチルドレンと働く子どもの人数が世界最多であり、路上で生活するあるいは働く 5-14 歳までの子ども達は、少なくとも 1,800 万人になると報告されている (Sondhi-Garg : 2004, pp.25-26、UNESCO : 2000, pp.1)。

これまでの調査結果から、デリー州で 6 歳から 14 歳までの就学年齢児童のうち、学校に通っていない子ども達の約 25% がストリートチルドレンであると見積もることができる (Panicker & Nangia : 1992, pp.53)。デリー州が 2003 年に行った調査によると、学校に通っていない 6-10 歳の子どもは 6.4% (104,643 人)、11-14 歳では 7% (80,971 人) である (デリー州政府 : 2006, pp.24)。この結果から見積もると、デリー州において 2003 年の 6-14 歳のストリートチルドレンの人数は 46,404 人であり、デリー州内の全児童数のおよそ 1.6% である。しかし、統計によっては、およそ 10 万人と見積もられている (Chakrabarty : 2002, pp.60)。

こうした調査においては、どのような生活状況の子ども達をストリートチルドレンと見なしているのだろうか。インドにおけるストリートチルドレンの調査は、比較的新しい試みであるため、国際的に同意された定義というものが無い。そのため、ストリートチルドレンについて、路上生活の原因と子ども達の精神的な特徴について Sondhi-Garg は、調査対象者を「路上で働いて生活をしている、1 年以上家族から連絡や支援を受けていない子ども」と限定して、10-14 歳の少年 147 人を対象に調査を行った (Sondhi-Garg : 2004, pp.122-124)。本論文においては、ストリートチルドレンを「路上を主な生活の場所として、家族から適切な支援・保護を受けずに生活する子ども達」と定義する。

3-2) ストリートチルドレンの生活

以下は、ニューデリー駅周辺に住み、NGO 'SBT' の活動に参加するストリートチルドレンの生活についてである。

< SBT の概要 >

SBT は、1988 年に映画監督の Mira Nayal によってニューデリー駅近くに設立された。活動の目的は、ストリート&ワーキングチルドレンが社会のメインストリームで生きるための環境を創ることである。活動内容は、教育、医療レクレーションなど子ども達の生活全般に関わっている。SBT の活動は 5 つのコンタクトポイント、4 つの生活施設、1 つの教育提供施設を通して行われている。活動資金は、インド政府、欧米の NGO、国内外の個人による寄付に拠っている。04 年度を通じて、支援を提供した子ども達は 3,700 人に及ぶ。

ニューデリー駅周辺で路上生活をする子ども達の中には、日常的に NGO の活動を利用している者もいるが、駅で暮らす子ども達の内 NGO と関係を持っている子ども達の割合は明確ではない。自身も数年前まで路上生活をしていた NGO 職員によると、子どもが NGO の支援を受けて、良い機会に恵まれるかどうかは、「運命」だという。ほぼ定期的に SBT の運営するコンタクトポイントに通ってくる子ども達は、来て最初に、職員やアシスタント³⁾ に促され歯磨きや入浴をする。入

浴は、職員に料金をもらって近くの公衆シャワーで行い、歯は歯磨き粉を借りて指で磨く。その後、コンクリートの床に3畳ほどの敷物を敷いて座り、そこで紙とペンが配られ、好きに絵を描いたり、字を書いたりして過ごす。ゲームをする子もいる。ソーシャルワーカーが小さな黒板を利用して、読み書きや計算を教えることもある。こうした活動はノンフォーマル教育といわれている。この合間に、体調の悪い子どもやけがをした子どもは診察を受け、薬をもらう⁴⁾。病院に行く必要がある場合は、アシスタントが病院に連れて行く。

コンタクトポイントには、毎日のように新しい子どもがやってくるため、ひと月に約45～60人程が新規に登録を受ける。新しく来た子どもは、職員かアシスタントによって、名前、年齢、出身地、家族構成、教育歴、本人と特定できるような身体の傷を用紙に記入される。このとき、子ども達は家族のいる家に帰りたいか、残って勉強したいかを聞かれる。子ども達を路上生活から脱け出させるためになされる職員やアシスタントによる説得は、カウンセリングといわれ、子どもに路上生活の有害さや施設の生活のメリットを説くものであるが、あくまで子どもの希望を優先するものであり、強制はしない。子どもに勉強したいという意思が確認された場合、その子は施設へと移される。家に帰りたくない10歳位までの子どもは、たいてい一度は施設に行く。路上生活の経験が短い子どもほど、施設に入ってから順応する傾向にある。長期に渡り路上生活を続けコンタクトポイントに通ってきている子どもには、施設になじめなかった10代後半⁵⁾の者が多い。彼らのほとんどが施設に滞在した経験があるが、何らかの理由で施設を出てきている。

子ども達は、昼食の時間までをここで過ごし、その後は映画を見に行ったり働きに行く。多くの子ども達はごみ拾い、荷物運び、洗車、駐車場の見張りなどをして稼ぐ。中でも、駅構内で集めたペットボトルを換金して稼ぐ子どもが圧倒的に多い⁶⁾。このようにして得られたお金は、映画やジャンブル、ドラッグに使われることが多い。

新しく家を出てきた子どもは、食事や寝場所を提供しているNGO⁷⁾について、駅周辺の子どもの達から情報を得る。子どもによっては、昼と夜、別々のNGOを利用している。夜は、NGOの提供する寝場所か駅の構内で眠る。

3-3) 路上で暮らす子ども達が直面する問題

NGOの活動に参加している子ども達の様子からは、外見の不衛生さと痩せて栄養が不足していること以外に、子ども達がどのような問題を抱えているのかは、一見して明らかではない。NGO職員やボランティアの中からは、「子ども自身は、自分の問題を意識していない」といった語りが聞かれる。また、路上を離れた子どもの口から、「路上にいるときは、自分の生活について何も考えなかった」といったことも聞かれる。インタビューの中で子ども達は、路上生活における様々な出来事や状況を「たいしたことはない」という口調で語ることもある。しかし、以下のような事柄に関しては、ネガティブに語られることが多かった。

子ども達が、最もよく問題として口にするのは警察による虐待である。子ども達は警官に殴られたり、お金を要求されたりする。警官からお金をもらって仕事を請け負うこともある。駅周辺で暮

らず子ども達にとっては、警察との関係において戦略的であることが重要である。なぜなら、子ども達が警官に殴られることを公衆が黙認している状況では、子ども達は警官とのトラブルにおいて圧倒的に弱い立場にあるからである。しかし、年齢が上がるにつれて、逆に警官が子ども達の暴力や仕返しに脅えることもある。

頻度や種類は異なるが、子ども達の多くにドラッグの習慣がある。最も多いのは、文具屋でソリューションといわれる修正液を購入して吸引しているケースである。子ども達自身も「売ることを禁じてくれれば買わなくてすむ」「ドラッグを止めるための施設に行きたい」などと言うように、問題を感じていることが分かる。

その他には、スリや盗みなどを組織ぐるみで行うギャングとの関係がある。駅構内の場合、それぞれのプラットフォームに古くから住んでいる 20-25 歳位のリーダーが子ども達を組織してスリや盗みをする。こうしたリーダーは、子ども達に服を与えたり、映画に連れて行ったり、子どもが警察に捕まったときにお金を払って釈放する。

性的虐待の危険も指摘される。子ども達は路上生活を通じて、男女問わず年上の少年や男性から性的な虐待を受けることがある。また、駅に住む少女達に対して、集団で性的な虐待を行う場合もある。路上に住む少女を性的に虐待する少年からは、虐待を受けた少女を軽蔑するといった状況が語られた。

その他には、路上で寝起きをしているために、不衛生で病気にかかりやすい、寝ている場所が危険で、物理的・精神的に安心して眠ることができない、といった状況もある。病気にかかっても、無料で診察を受けることができる病院では、ストリートチルドレンであることから、きちんとした診察を期待できない。子ども達がしているゴミ拾いなどの労働は、不衛生・不安定で低賃金であり、子ども達の身なりの汚さやイメージによる公衆からの虐待もある。

3-4) NGO とノンフォーマル教育

インドでは、社会・経済的低階層者のために活動を行う NGO が数多くあり、その数は 10 万を超えると言われている (Nawani : 2002, pp.122、Chandra : 2005, pp.1)。ストリートチルドレンに関しても、国際機関、政府、NGO が協力関係を持ち、様々な活動を行っている。インド国内では、政府以上に NGO が提供するプログラムがより実践的であるといわれる (Sondi-Garg : 2004, pp.117)。初等教育の普及に関しても、早急に実現すべき課題であるとの認識の下、NGO はノンフォーマル教育を担う役割を期待されている。

1960 年代半ばには、就学率の伸び悩みとウエステージといった問題に直面したインド政府は、全ての子ども達を就学させるためには、フォーマル教育だけに頼ることはできないと考え、ノンフォーマル教育の必要性を認識していた。1964 ~ 66 年の Education Commission において提案されたノンフォーマル教育は、フォーマル教育を否定はしないが、フォーマルな学校制度への全面的な依存を放棄し、フォーマルな学校制度と同等な地位をもつパートタイム教育という代替チャンネルの大規模な開発を目指すものであった (弘中 : 1983, pp.4-5)。

フォーマルな学校教育の代替として教育普及を期待され、1970年代後半から実施されるようになったノンフォーマル教育は、現在ではNGOによって広く実施されている。しかし、その性格は多様で複雑であるため、NGOを定義することは非常に難しい。そのような状況にあつて、教育に関するNGOの数を特定することも困難であるが、その数は州によって異なり、西ベンガルで470、タミルナドゥで373、マディヤプラデシュで77といった統計もある。しかし、識字やノンフォーマル教育に関係していなくても、例えば、エイズに関する啓発プログラムを行っているNGOは、「教育」に分類されるため、ここで言う、就学年齢の子ども達を対象にしたノンフォーマル教育を実施しているNGOかどうかは不明である(Nawani:2002, pp.122)。デリーでストリートチルドレンや働く子ども達を対象にノンフォーマル教育を提供しているNGOによると、ストリートチルドレンや働く子ども達のために活動をするNGOはデリー州内に24ある(Butterflies:2006)。

こうしたNGOは子どもの権利を守るという理念は共有しているが、子どもが働くことに関しての考え方や、提供している支援内容は異なっている。NGOの中には、Child Line⁸⁾という、困窮した子どもを見かけた人や子ども自身が非常事態に24時間助けを求められることができる電話相談プログラムを受け持っているものがあり、活動によっては情報を交換し合い、連携している。

以下は、NGOによるノンフォーマル教育の実践がどのようにして、労働や路上生活の経験がある子ども達に教育を提供しているのか、SBTの事例を通して見てみる。

3-5) NGOによるノンフォーマル教育の実践

労働や路上生活の経験がある子ども達の多くが、最初に教育の機会を得るのがNGOによるノンフォーマル教育である。ノンフォーマル教育で実施されるカリキュラムや教科はNGOによって異なるが、基本的な読み書き、計算、一般知識の獲得は共通して目指されている。その他には、性教育やエイズ教育、レクリエーション活動などが行われる場合もある。

SBTにおいてノンフォーマル教育という言葉には、次の二つの形態の子ども達を対象にした活動が含まれている。まず一つ目の形態は、路上生活を続けながら、定期的にNGOのコンタクトポイントにやって来る子ども達の、自習の形をとる学習形態である。この場合、学習は子どもの気分次第で、勉強を教えるソーシャルワーカー⁹⁾は、やる気のある子どもに対して個別に読み書きや計算を教える。もう一つの形態のノンフォーマル教育は、施設で行われており、学校のように先生が黒板を使いながら授業をするというものである。この場合は、経済的な事情でフォーマルな学校に就学できない近所の子ども達や、路上生活をする子どもの中でも家族と住んでいる、あるいは定住している子ども達が対象となっている。

ノンフォーマル教育では、教育内容や方法がNGOや現場の教師によって様々である。子ども達にとっても自由度が高いため、学習を継続するには子ども自身に強い意識が求められる。よつて、ノンフォーマル教育が、路上生活経験のある子ども達にとって、何かを学ぶ機会となりうるか否かは、子ども自身の興味や考え方、現場の教師の子ども達への対応による。言い換えると、ノンフォーマル教育はその柔軟さゆえに、あらゆる状況の子ども達にとって開かれ、アクセスがしやすいとい

う反面、子ども達にやる気がなかったり、教師と関係がうまくいかなかった場合には、子どもが何も学習しないまま時間を過ごしてしまうということもありうる。

以下では、路上生活経験のある子ども達がノンフォーマル教育を経て、どのようにしてフォーマルな教育を自分の生活の中に位置付けることができたり、できなかったりしているのかを、子ども達自身の語り¹⁰⁾に基づき考察を行う。

4 路上生活経験が学校の教育達成に及ぼす影響 一路上生活経験のある少年の語りー

・少年D 18才 (路上生活歴8年 現在、NGOの生活施設で暮らす)

Dは7歳から15歳までの約8年間を路上で過ごしたにも関わらず、コンタクトポイントを経て、施設の生活に適応し、勉強を続けている数少ない少年の一人である。現在18歳で、通信制で後期中等教育修了資格を取得すべく勉強している。彼は、ジュートで鞆や壁掛けなど作る才能があり、将来はジュートの製品を作って売る仕事をする傍ら、故郷で貧しい人々にジュート製作の技能を教える仕事をしたいという。

今の人生の目的は勉強することだ。でも勉強を始めるといつも眠くなってしまう。集中出来ない。眠ってしまった後で後悔して腹が立つ。僕には仕事をする才能はあるが、教育がないから勉強ができない。教育がないせいで、お金を稼げない。教育がなくても仕事をしている人がいるけれど、僕の夢は違う。勉強して働くのが夢だ。もし仕事をして、何かを書くときにきちんと書けないと恥ずかしい。ヒンディーも上手く書けないし、英語はあまりできない。

(2005年10月 フィールドノートより)

施設に入所した当初、普通学校に通っていたが、学年末の試験で落第したため、通信制に切り替え、前期中等教育修了資格を通信制で取得した。通信制では各科目33%回答できていれば合格である(NIOS:2006, pp.15)。合格したが、成績は悪かった。特に英語は、不得手であったが、路上生活を止めた3年前と比べて、英語の得意な友達や海外からのボランティアとの接触により、英語で簡単な会話ができるようになっていく。会ったときには「僕は最初に会った時と変わった？」と何回も尋ね、英語が上達したこと、ジュートの技能が進歩したことを告げると、その度にうれしそうにした。今は、ジュート製作についてさらに学ぶため大学進学を目指して勉強している。

大学では、働きながら勉強する。SBTも援助してくれると思う。教育がないと人に下にみられる。才能があっても教育がないとだめ。自分は才能と学歴が釣り合っていない。でもがんばって釣り合わせる。今は英語の勉強をがんばっている。勉強したいというと、誰に言っても、「勉強しなさい、いいことだよ」といわれる。どう思う？自分の計画を？

(2006年9月18日 フィールドノートより)

Dは常に自分の考えや目標を周りの人に相談し、意見を求める。友達だけでなく、信頼しているNGO職員や、研修で来ている学生、外国からのボランティアなどに積極的に意見を求めている。自分の熱意と才能をまっすぐにアピールするため、色々な人からの協力を得ている。施設に暮らしだしたばかりの3年前と比べて、今では段々と勉強することにも慣れ、一層集中しようとしている。それでも、目標の大学に進学するためには、学費も高く、成績もかなりあげることが必要である。

今は、大きな夢があるから怖くも感じる。多くの人に自分の夢を話すと、「一生懸命がんばらないと、」といわれる。がんばるつもりだけど、それでも怖い。Prospectus (大学の入学案内) をもらいに直接大学に行くのは怖い。大学という場所に行くのを躊躇する。そのこの学生と比べて自信がないから、そういう所に行くのは気が進まない。でも自分で行くつもり。

(2006年10月3日 フィールドノートより)

自分の才能に自信はあるが、目標に向き合うこと、そして大学に行ってみることが怖いという。彼は、普段は一人で出かけて行くことを怖がるようなことはない。しかし、この日、「入学案内を人に持ってきてくれるように頼んでいるがなかなか来ない」というDに、自分で直接大学に行くことをアドバイスした筆者に対して、Dはためらいを見せた。努力はしていても、大学という場所が、自分とは違う生活を送ってきた学生達が通う場所であること、自分にとって大きな目標の場所であることから、距離を感じてしまうようであった。

Dは常に前向きに自分の才能を信じて、学歴というメインストリームでの競争に挑戦をしている。長い路上生活で、教育歴も勉強する習慣もあまりなかったDにとって、それを可能にしたのは、子どもの希望や適性に合わせるNGOの教育実践によるところも大きい。Dは通信制で勉強していることについて次のように言っている。

先生と生徒の関係では、子ども達は先生が威圧的だと質問したりできなくなる。先生と友好的だと何でも聞ける。ここ¹¹⁾では、先生に自由に質問できる雰囲気がある。自分はレギュラースクールで落第して、またやり直したら時間がかかるから、通信制で勉強することに決めた。

僕はストリートにいたとき、長い間勉強していなかった。そのときは、クスリもしていたから、その影響が今でもあって、頭がうまく働かない。だから、神様にお祈りするときは、僕の頭が良くなるようお願いして。

(2006年10月12日 フィールドノートより)

SBTの教師は、路上生活が長かった子どもは、年齢が上がってから学校に行くことを恥ずかしく思うこともあるため、そういう場合に通信教育は子どもの状況に合っている、という。Dの場合は、彼自身の忍耐強く前向きな性格や適性と、それを認めて、子どもに合った教育を提供する

NGOの教育実践があって、少しずつ自信をつけながら学習し、将来を考えるような状況に至っている。路上生活経験のある子ども達が多く、困難を抱えながらも、教育の機会を自分の将来のために有効なものとするためには、子ども本人の意志と行動と、それを実現するための生活環境や周囲に相談をできる人がいることはもちろんのこと、それぞれの子どもにとって挑戦することが可能な教育が用意されているということが重要だといえる。しかし、こうした子ども達は学校で勉強する機会を得ても、その後、自ら設定した目標に向けて努力し、それを達成するためには、普通に就学した子ども達に比べて、一層の努力が求められる。

Dは路上から施設に移り、その生活に適応したが、施設の生活に適応できずに路上に戻る子どももいる。こうした子ども達もノンフォーマル教育といわれる、1つ目の形態の教育を経ている。路上生活を続けながら、ノンフォーマル教育を受けている子ども達にとって、教育はどのような意味があるのだろうか。

・少年Z 11歳（路上生活歴約1ヶ月 工場労働約2年 NGOのナイトシェルターを利用）

Zは2年半程、スーツケースを作る工場で働いていた。一緒に働いている子どもとけんかしているのを、工場のオーナーに叱られて、逃げ出して来たという。その後、しばらく駅で生活していた。

親戚が家に来て、子どもをデリーに仕事につれていってあげると（両親に）言った。子どもは家族のために、お金を稼ぐよと言ったけど、実際はその人がオーナーから300-400Rsもらっている。こういう事が村ではよくあった。オーナーは小さい子どもを雇うのが好き。なぜなら小さい子は何も給料に関して言わない。食べ物も良くないけれど不満を言わない。でも、大きくなって色々と分かるようになると、子どもは逃げ出す。

（2005年10月 インタビューより）

ZはNGOの施設に2週間滞在したが、施設の他の子ども達の話聞いて怖くなって逃げ出したという。

ある日手にけがをして、リキシャドライバーが自分を病院に連れて行ってくれた。その後、施設に2週間いた。そのとき19人の子ども達がいたけど、ロックがかけられて外に出られなかったからこわかった。お兄さん（職員）が許してくれないと、外に行くことは全くできなかった。だから、階段から逃げた。ある日、施設のお姉さんに会って「なぜまたストリートに戻ってきたの？よくないわよ」と言われたけど、自分は施設にいたくない、どうすればいいんだ？お兄さんにも「何が施設で問題なんだ？」ときかれたけど、何もないと答えた。鍵をして子どもを閉じこめているし、ある男の子は「スタッフが目をえぐって、たたいたりするよ」と言ったから、怖くなった。施設に行

く事が最初はうれしかった。でも他の子が脅すから怖くなって逃げた。

(2005年10月 インタビューより)

数日に渡って、DがNGOの施設に行けば生活も面倒みてもらえて勉強ができることを説明したが、Zは施設に行くことを拒否し、お金を貯めて家に帰ると言っていた。

D：施設に行った方がいいよ。両親も働きに行かせただろう。両親も良くない。お金に貪欲だよ。

Z：そうじゃない。両親はおじさんが言ったから、そうしただけなんだ。両親は何も知らないんだ。

(工場の)オーナーは両親に子どもは元気だと言っているんだ。2,3ヶ月に1度は電話で両親と話すけど、オーナーが目の前にいるから、元気だと言うしかない。

D：電話番号があるなら、両親と外に行って話せるだろ。

Z：僕はもっていない。1000Rsなければ家に帰らない。

D：絶対に1000Rsはたまらないよ。

Z：いや、貯まる。自分の住所、家は分かる。時々警察が子どもを捜しているが、自分のオーナーのように児童労働をしても、警察はその人が政治家だと知っていて、お金も警察に渡しているから、何もきかない。

D：駅でお金を稼ぐのはすごく難しい。自分も8年駅で過ごして、お金をためていつか村に帰って、店を持つと思っていたけど、出来なかった。いつも警察がたたきし、年上の子がお金をとるし、他の人々も虐待するし、すごく難しい。今は(路上生活を)始めたばかりだから分からないだろうけど、駅で直面する問題に気づいていないだけだよ。だけど僕は8年間駅にいて得られなかったものを、施設で1年の内に得られる事に気づいたよ。今は学んだことから、お金を稼ぐ事ができる。家に帰った方がいいよ。両親と一緒に住みたいと言った方がいいよ。そして両親を手伝ったらいい。両親が戻れといってもここに戻ってこない方がいいよ。どうして駅にいたんだ。駅にいるのは違法だよ。だから警官は捕まえるんだよ。

D：1-2ヶ月どんな仕事でもして、1000Rs稼いだ。1000Rsなくて家に帰ると自分が恥ずかしいんだ。50-100Rs今あるけれど、1000Rsためてから帰る。

D：10-15年かかるよ

Z：僕は3-4ヶ月でためるよ。自分は他の子達のように盗みとか悪い事はしていない。

(2005年11月 インタビュー中の会話より)

断固として施設に行くことを拒否するZも、ほぼ毎日NGOのコンタクトポイントに通い、座って絵を描いたりして過ごしていた。このように、施設に送っても逃げ出してきてしまう子ども達に対しては、職員はそれ以上のアプローチを取ろうとしない。子どもが再び施設に行くことを了解するか、あるいは自分から行きたいと言ってくるまで、子どもは路上生活を続け、コンタクトポイントに通い、ノンフォーマル教育を受けている。NGOの職員からは、家や施設から何度も路上に戻

る子ども達について、「路上の自由が好きだから」「一つの場所に留まっていられない子どももいる」というように、子どもの性格に原因を帰す見解も聞かれた。Zは勉強することについて以下のように語る。

Z：英語もヒンディー語も分からない。名前も英語では書けない。学校には行ったことがない。宗教について教えるマドラサに行っただけ。その時も、勉強はあまり一生懸命しないで、ビー玉で遊んでいた。

(中略)

(勉強したい?)

Z：もう仕事を始めたから、今は働きたい。もし誰か親戚と一緒に住めたらうれしい。

D：どうして親戚の人がいい人だと分かるの。

Z：数ヶ月して、良くない人なら出てくる。1,2ヶ月でお金をくれるならいいけど、「あげるよ、あげるよ」と言ってくれなかったり、「いつかね」とかいったら、その時はもうその人とは働かない。

(何の仕事したい?)

Z：スーツケース作り。僕はそれについて知っているから。他の仕事は知らないし、他の仕事は見つけられそうにないから、この仕事をしたい。誰かが教えてくれれば、他の仕事もできるけど。

(2005年11月 インタビュー中の会話より)

Zの語りから、すべての子ども達がスムーズに施設での生活に適應できるわけではないことが分かる。NGOでは施設に入った子ども達全員に、衣服の提供や教育の手続きなど迅速な対応が出来るわけではない。以前に給料が払われなかった経験から、大人からの対応を期待出来ないと判断したことも、Zが施設を出てきた一因と考えられる。施設を出てくる子どもの語りでは、「信じて待つ」事の難しさがしばしば聞かれる。また、Zは、今までに経験のない他の仕事を始めることや、勉強を始めることの可能性を考えていない。労働や路上生活を経験した子どもにとっては、自らの窮状を大人に相談することや、自分で技能を修得することや学習することに思い至る、ということにさえも、難しさが伴うこともある。

NGOの職員も、Dのように自分から積極的に考えを表現する子どもには、それに相当する対応を取るが、Zのように消極的である、あるいは反抗的な子ども一人ずつに気を配るということは、時間的・人間的な制約による困難もある。一方で、ストリートチルドレンにとって、このコンタクトポイントでの職員や仲間との接触、ノンフォーマル教育が、路上を離れるかどうかの決定に影響が大きいこと、そして、子ども一人ひとり異なる性格や、路上生活をするに至った経緯を考慮するならば、この段階で子ども一人ひとりに対して、よりきめ細かな対応が望まれる。しかし、子ども達と身近に接するNGO職員は、学校や施設といった「メインストリーム」における生活が、全ての子ども達に可能であるとはみなしていないことが、その対応から見て取れる。

5 まとめ

山本（2001：pp.321）は、開発教育¹²⁾で問題とされていることは、「低開発」の開発・発展において「教育」の果たす役割を大きなものにしていこうという意図・任務であろうが、そのとき開発＝発展をよしとする尺度がとられた上で差別化がなされており、なぜ開発・発展がよいことなのか、またなぜ教育の役割がそこで強調されるのか、その根拠は問われているようでいて問われていないとして、「教育そのもの」の行為が、触れることのできない教育プラチック（実際行為）の世界があるにとどまらず、より根源に「語りえぬ」文化プラチックの世界があるという。子ども達の路上生活経験における文化プラチックがどのようなものであるのか。そのことを曖昧にしたままネガティブに評価するのではなく、誰にとってのどのような問題なのか、あるいは誰がどのように「問題とみなしている」のかを、明らかにしていくことは、教育や開発が強調される中でその根拠を問い、人々の生活水準の向上といった開発本来の目的を実現する上で不可欠である。

子ども達は路上生活において、学校教育において評価される生活態度や価値とは異なる路上のルールを身につける。路上生活が長ければ長いほど、「メインストリーム」の社会で生きていくために不可欠な学校教育において、評価されることは難しくなる。路上を離れる子どもに対しても、留まる子どもに対しても、その困難を乗り越えることは、本人の選択や努力の結果とみなされている。

学校に行くことで、「メインストリーム」の社会における競争に参加する機会を得ても、最初から不利なその競争で負けた場合に、再び子どもたちは路上に戻ってくることになるのだろうか。子どもたちが路上生活を止めて、「メインストリーム」の社会で生きていこうとすると、子ども達の様々な状況や過去の経験が、その実現を困難にするようなものであったとしても、アクセスすることで、現在の生活における問題が軽減されるような教育が用意されていることが必要である。

子ども達が最初に得る教育の機会は、ノンフォーマル教育であるが、ノンフォーマル教育を経て、学校教育へアクセスすることで機会の平等を実現したとしても、路上生活経験のある子ども達が自らの過去の経験や適性のために学校で直面する困難は、学校が一定の価値を志向しつつ、その価値を体現できなかった子ども達の居場所を持ち合わせていないことを示唆している。

子ども達は、教育という平等な機会を得ることで、必ずしも自らの責任ではない、路上生活の理由となった家庭背景、路上での経験や身につけた習慣を否定される。そして、機会を得たことと引き替えに、教育における評価を自己責任として引き受けることを求められる。教育が選抜という機能を果たすためには、色々な意味でスタート地点が異なっている子ども達を、一定の基準で測ることが不可欠である。「排除」のない教育がどのようなものとして構想できるのかは、多くの議論と知恵を必要とするが、教育のシステムが認める価値に合わせて子ども達を選択することではないことは確かである。教育というシステムの中で、子ども達が抱える困難がどういったものであるのか、路上に戻る子ども達の視点から見つめ直す作業が、なぜ教育をもってして開発を行うのかといった根拠を見出す上で必要とされているのではないだろうか。

教育制度から取り残された子ども達の教育について構想するとき、機会を得ても提供された教育の範囲で「うまくやれない」子ども達がいることを見据え、その先まで想定することが必要となってくる。路上生活の特徴として語られる「自由」や「労働」が、子ども達が学校で経験する価値とどのように異なっているのかを理解することは、教育において評価されてきた「成長」や「発達」といった概念からはみ出すような、子ども達の日々繰り返されるゴミ拾いや車の見張りなどの労働や、その日暮らしの生活のあり方に対する評価を再考する機会として重要であると考え。

<注>

- (1) 2005年4月から2006年10月の間に行った現地調査は、日本学術振興会特別研究員奨励費の助成を受けた。
- (2) 国連の定義では、1日1ドル未満で生活する人々を貧困層としているが、人々の生活を貧困とみなすかは、現地の物価や社会サービスと照らし合わせて考える必要がある。1ドルはインド通貨約50Rs（ルピー）に相当し、月収で1500Rs（約4500円）である。ちなみに、デリー政府の2004年度の資料によると、2001-02年度1人当たり1ヶ月の支出額が最も高いデリー州では、1453Rsである。（Government of NCT Delhi：2006）。インド政府の定義による貧困層は、全人口の26%。
- (3) コンタクトポイントでは、以前に路上生活経験のある子どもの中から、生活態度が向上した子どもをアシスタントとして雇っている。そうした子どもが施設に移り、職員になる場合もある。
- (4) 2005年より、Health Postというプログラムが始まり、常駐の医師が平日の10時半から1時まで滞在して、簡単な医療行為や薬の処方を行っている。
- (5) 最近の調査（2006年9月）では、年齢の高い子ども達が、警察に一斉に保護施設に送られた後であったため、子ども達の平均年齢が低くなっていた。一時的な状況であると思われる。
- (6) 2本集めて3Rs（約9円）になる。一日の稼ぎは平均して、50～80Rs（約150～240円）であるが、子どもの年齢にもよる。
- (7) 駅から歩いて10分ほどのところにある教会が、敷地内の小学校の渡り廊下を、子ども達に夜7時から朝6時まで寝場所として提供している。一緒に寝泊りする常駐の職員がおり、食事、薬、毛布なども、提供している。18歳未満の子どもが利用できる。
- (8) 地域ごとにChild Line Centerがあり、連絡があった場合、職員が相談に乗り、場合によっては子どもの元へ行き、施設に連れて来て対処する。
- (9) 教師がいるわけではなく、子ども達の登録やカウンセリングも行うソーシャルワーカーが勉強も教えている。
- (10) 子どもに対するインタビューは、現地語であるヒンディー語で行った。筆者のヒンディー語理解が不十分であるため、通訳と2人で基本的には1人の子どもに対して（数人の子ども達

が話に参加する場合もあった)、テープレコーダーで記録を取りながら、主に NGO のコンタクトポイントで話を聞く形を取った。

- (11) NGO では、午前中は通信制の子ども達のために授業を少人数制で行っている。
- (12) 山本 (2001 : pp.349) は、従来の開発の言説における教育の開発を、場所を非在化する社会設計の「開発教育」とする一方で、山本の提案するこれからの教育の開発を、場所を生かす社会環境設計の「教育開発」として区別している。通説として開発の文脈で使われる「開発教育」の意味からすると、ここでは「教育開発」を意味していると考えられる。

<引用文献>

- 江原裕美 2001 「序章「開発と教育」研究の意味」『開発と教育』(江原裕美編) pp.23-31 新評論
- 弘中和彦 1983 「インドにおける Non-Formal Education Center の発展」『九州大学比較教育文化研究施設紀要』34号 pp.1-15
- 押川文字 1998 「学校」と階層形成 テリーを事例に」『現代インドの展望』(古賀正則・内藤雅雄・中村平治編) pp.125-148 岩波書店
- 世界銀行人間開発ネットワーク 2001 「世界銀行の教育開発戦略」(黒田一雄・秋庭裕子訳) 広島大学教育開発国際協力研究センター
- ユニセフ 2006 『世界子供白書』 日本ユニセフ協会
- 山本哲士 2001 「補章 教育開発の新たなビジョンを求めて」『開発と教育』(江原裕美編) pp.351-356 新評論
- Chakrabarty, Vandana 2002 Education of Urban Disadvantaged Children, In *India Education Report*, Govinda, R.(ed), National Institute of Educational Planning and Administration, New Delhi: Oxford University Press, 47-58
- Chandra, Puran 2005 *NGOs in India Role, Guidelines & Performance Appraisal* New Delhi: AKANSHA PUBLISHING PRESS
- Government of NCT Delhi 2006 *DELHI Human Development Report 2006* New Delhi: Oxford University Press
- Hindustan Times 2004年12月4日
- Jayapalan, N 2005 *Problems of Indian Education* New Delhi: ATLANTIC
- National Institute of Open Schooling(NIOS) 2006 *Prospectus 2006-2007 Secondary and Senior Secondary Courses* New Delhi: National Institute of Open Schooling
- Nawani, Disha 2002 Role and Contribution of Non-Governmental Organization in Basic Education, In *India Education Report*, Govinda, R.(ed), National Institute of Educational Planning and Administration, New Delhi: Oxford University Press, 121-130
- Panicker, Rita & Nangia, Parveen 1992: *Working and Street Children of Delhi*, New Delhi: National Labour

Institute

Social and Rural Research Institute 2005 *All India Survey of Out-Of School Children In The 6-13 Years Age Group*, New Delhi: Ministry of Human Resource Development, Government Of India

Sondhi-Garg, Poonam 2004 *Street Children: Lives of Valor and Vulnerability*, New Delhi: Reference Press

Zutshi, Bupinder 2000 *Research Report on a Situational Analysis of Education for Street and Working Children in India*, New Delhi: UNESCO-New Delhi

Formal education and Street lives of children
— **Focusing on street children in New Delhi, India** —

Mizuki HARIZUKA

This article aims to investigate difficulties which street children face in reaching formal education, or after reaching it, focusing on educational support of NGOs for working children and street children in New Delhi, India. It will enable us to examine the limitations of education for better living standards and the elimination of poverty, both ideals of development.

In India, there are two types of educational problems according to social class. For the children from the middle class, who go through high competitive examinations, serious tension is pointed out as a problem. On the other hand, there are vast numbers of children not attending school. Amidst this situation, since 2001, the Indian government has set a 'Sarva Shiksha Abhiyan (Education for all campaign)' which aims for providing school education for all children age 6-13.

In this article, 'children who live mainly on the street without proper protection and support from their families' are called street children. Street children are also non-school going children. According to ILO and UNDP reports, the numbers of these children in India are estimated to be at least 18 million, the largest number in the world. In Delhi, 6.4% of children are out of school, and according to some counts, the number of street children in Delhi is estimated at 45,000~100,000.

International organizations, the Indian Government, and NGOs are providing programs for street children. Programs provided by NGOs are thought more practical in their approach. These NGOs work based on the ideas of children's rights, but each of them provides different types of activities.

Case studies of children who joined educational programs of NGOs illustrate how these programs work in the lives of children. Here, narratives about the impact of NGO programs, told by the boys who have experienced street lives, explain how they think about their present and future situation. Getting NGO support, the boys who adapted to the rules of mainstream society including formal education go through difficulties because of insufficient educational background. On the other hand, even after getting the opportunity to stay in NGO shelter homes, it is not easy for some boys to stay in the shelter and get used to its rules, in part because it's difficult for young children to imagine school life apart from their work or street lives.

Even if a child is given the opportunity to leave the street, it depends on the child him/herself whether to adapt to formal education. The opportunity to get formal education would seem to grant these children a chance for a better living standard, but such an opportunity alone is not enough for children who have difficulties with this option.